〈翻訳〉

コンラート・ケストリーン
自然としての文化－文化としての自然：民俗研究における自然の概念（2001）

（訳）河野　眞

自然としての文化*

1982年11月3日のことである。旧東ドイツ「国営コンベヤー・クレーン製造会社ケーテン」の委託を受けて、オーストリアの「持続可能な発展のためのインスティテュート」[1]の中央作業グループは、ハレのマルティーン・ルター大学に付属する植物園を訪れた。作業班の赤本をめくってみると、そこにはこう記されている。

> どんよりした秋空の日、しかし素人の関心をも惹くようものも幾らかはあった。・・先ず、丹精こめて手入れされた野外施設を観察した。・・・次に、湿った展示室へ足を踏み入れると、そこには棘の多い厚肉の植物がうっそうと集められていた。

そして締めくくりである。

> 植物園での滞在は興味深く、教わることの多いものだった。その後、私たちは、快適なコーヒー・ハウスへ移り、次いで街を散歩した。上がりは、予約していたインターホテル「シュタット・ハレ」だった。手入れの行き届いた場所での会食のひとときは飛ぶように過ぎた。

自然　－それはこの事例でも挙げることができようが　－　は私たちの日常に編入されている。棘のある植物も、毛が生えた同類も、人間があつかえるものであることに、ほとんど何の支障もない。自然がなお純粋で、手

＊原文は区分されていないが、読みやすさを考えて小見出しをつけた。

つかずで、原初的ですらあるのはどこ、と声高に問うのは、今日の最もポピュラーな議論の一つとなってはいるが。――ちなみに1999年にチロールのシュヴァーツで落盤が起きたあと、鉱山を管轄する大臣は、山々が孔だらけの状態を前にして、責任の所在をこう説明したものである[1]。

そこはもはや鉱山ではありません。歴史から取り残された孔があるだけで、それが自然の暴威にさらされているのです。

私たちが出遭う自然の形態は、もはや自然そのものではなくなっている。かかる出会いの形態はすでに文化である。人間に特有なものとしての文化は、人間の第二の自然であり、それが、意味付け能力を以て自然を処理する存在である人間の本来の＜自然＞となっている。

フォルクスクンデ（民俗学）はこれまでも常に死亡告知者の役割を果たしてきた。民謡を＜消え失せる前に＞採録し、湮滅に瀕した習俗行事を消滅の直前で記録にとどめ、取り壊されるはずの古い家屋に関心を向ける、という具合である。同じことが、今回の大会のテーマである自然と文化をめぐるディスクールについても言えるかもしれない。発表要旨の表紙をかざる花のデザイン[ii]を目にし、そこに、環境との関係を憂慮すべしとのシグナルがこめられているのに接すると、自分たちがどんな時代にいるのかを改めて痛感させられる。学問を社会行為と解し、ぼろ服が自ら繕ろいをも手がけるようになった時代、そこではまた、この十年ほどは、ソフトなアイロニーに身をゆだねるようになっている。合成繊維のカジュアルもヘネス・アンド・マウリッツ社[iii]のお気に入りになって久しい。

しかし見方を変えると、自然と文化のテーマは、今も常に奏でられるほかない古い竪琴である。なぜなら、現今のモダンに対して、また私たちの専門分野に対して（その始まり以来）常に音合わせの基本となってきたのは、ここに発する弦音だったからである。今日のモダンが現存するようになって以来、私たちはみずから自然に向かって語りかけ、それによってコントラストを保ってきた。新旧の合金から成る＜民俗文化＞[iv]にも、自然

1　次の新聞記事による。Kurier vom 14. Jul. 1999.

なものという正統化の根拠づけが、音合わせの導入音さながら響いている。

もっとも、いとも簡単に自己と折り合いをつけて、我らが専門分野こそ掛け替えのない自然儀礼なり、との意味付与もあり得ないではない。そうした方向づけは、失われた自然性を取りもどすことを約束しよう。農民が農民自身の地所にある姿を以て自然な民[2]、すなわち土を構成する存在と解し、それゆえ高次文化社会のテリトリーに屹立する根生い文化として農民を位置づけるのである。その際にも、高次文化社会が、同じ土地のよそ者ら（すなわち農民たち）に自分たち自身を重ねるようになるのは、高次文化社会が自然なるもののなかに自己の出自を覗き見るようになるのを待たねばならない。ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール[v]は『ドイツの民の自然史』[3]において自然史を高らかに歌い上げたが、その実、描かれたのは、（上のような仕組みとしての）文化であった。かくしてエスノ関係の諸学は、モダニゼーションの高貴な申し子とまでは言えないにせよ、自然と文化の緊張のなかで自己をかたちづくってきた。そのアプリオリ性は、人間と国民の起源の自然性のなかに基礎づけられている。

民のたましい[vi]（延いては国民性）の実存という要請、そして後に浮上した部族の顔立ちが示唆したのは、モダンのなかには、（またモダンの発端においてはじめてこの設問が考えられるのだが）自然性のチャンスが存在するという見方であった。言い換えれば、人間に刻みこまれたエスニック性にのなかにおいて、ということでもあった。そうした連続性、すなわち彫り込みの探索が突きつめて議論されてはこなかったこと、これはフランスのアナール派の言う長期持続[vii]がよく示している。そのため、文化エコロジー的環境を導入した地中海人のモデルに即した指摘が、今日、脱バルカン化の特ダネとして論じられるほどである[4]。

2　自然な民（Naturvolk 自然民族）については次を参照 , Wolf-Dieter KÖNENKAMP, *Natur und Nationalcharakter. Die Entwicklung der Ethnographie und die frühe Volkskunde.* In: Ethnologia Europaea 18 (1988), S.25-50.

3　Wilhelm Heinrich RIEHL, *Naturgeschichte des Deutschen Volkes als Grundlage einer deutschen Social-Politik.* Stuttgart 1869.

4　Narodna umjetnost, 36: I/1999 (*Tagungsband des Symposions“ Where Does the Mediterranian Begin?”*).; 参照 , Konrad KÖSTLIN, *Where Does the Mediterranian Begin? Midierranean Anthropology from Local Perspectives.* Zagreb und Krk, 8. Bis 11. Oktober 1998. In: Österreichische Zeitschrift für Volkskunde, 53: 102 (1999), S.382-387. グラウビュンデン州（Graubünden [訳注] スイスの州・都市名）のレトロマン（[訳注] スイス南部の山岳地帯のロマン系住民）研究では、現今をも射程に入れてはいても、ドイツ民俗学会のような現代でも、シンポジウムとなると母権制の議論が歓迎される。

ヴォルフガング・エメリッヒ[viii]が早く指摘したことだが[5]、ゲルマン的フォルクスクンデは、ゲルマン始原のなかでは、自然とポエジーと文化が一体であったことを説いてきた。＜ナイーヴな＞文学（素朴文学）と＜センチメンタルな＞文学（有情文学）というフリードリヒ・シラーの定義[ix]は、自然と文化をめぐる議論における賢明かつ知的であることにおいて勝（まさ）ったヴァージョンであった。しかしそこでもなお、＜自然＞が先ず決められ、次いでその＜喪失＞が診断される。19世紀は、私たちの専門分野では文献研究の世紀でもあったが、そこでポエジー（詩心）と記念碑的な言語的な産物が提示したのは、自然と文化の結合であった。すなわち（ポエジーと言語的記念碑の）両者ともに起源と結びあわされたのである。

のみならず、その起源は、現今の慣習にも延びているとされる。それは、このハレの地においてハンス･ハーネ[x]が＜民族体学＞にかんして取り上げた原理論で、これまた私たち自身の学史がたどった仮説の一つと見なければならない[6]。1935年にハンス・ハーネは＜我らが民の早春の朝＞[7]＜より明るい未来に（向けて）総統に＞極彩色の花束をそっと差し出した。＜我らが先史に＞[8]捧げられた博物館を擁するハレは、早くから、民族体アヴァンギャルド運動の発信地であった。すなわち先史・黎明史と人種学・民俗学とのアマルガムであるハーネの＜民族体学＞が現れる共に、＜民族体学のための地域施設＞がこの地に設立されたのである。さらにこの博物館長は、ルスト文化相[xi]の特別措置によって教授に昇格し、講義には多数の聴講者をあつめ、最後はハレ大学学長にまでなった[9]。

5　Wolfgang EMMERICH, *Zur Kritik der Volkstumsideologie.* Frankfurt/M. 1971.

6　Annette SCHNEIDER, *Volkskundliche Forschung und Lehre in Halle.* In: Sachsen-Anhalt. Journal für Natur- und Heimatfreunde, 3: 3-4 (1993), S.21-25. この論考には特に注目したい。ハンス・ハーネは自然なあり方を年中行事としての民俗行事のなかにカプセル状に保存されていると見たが、＜自然なもの＞を探究するその種の仮説を、ドイツ民俗学の学史に組み込まれたものと見るのは、まことにもっともなことである。ハーネに特定すれば、これまで＜民族体的な学問＞に関する次の包括的な研究においてすら言及されなかっただけに、上記の研究のもつ意味は大きい。参照 , Wolfgang JACOBEIT / Hannjost LIXFELD / Olaf BOCKHORN (Hg.), *Völkische Wissenschaft. Gestalten und Tendenzen der deutschen und österreichischen Volkskunde in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts.* Wien / Köln / Weimar 1994.; またハンス・ハーネについては次のベルリン大学の学位論文を参照 , Irene ZIEHE, *Hans Hahne (1875 bis 1935), sein Leben und Wirken. Biographie eines völkischen Wissenschaftlers.* Halle (Saale) 1996.

7　Hans HAHNE / Heinz Julius NIEHOFF, *Deutsche Bräuche im Jahreslauf.* Halle (Saale) 1935, S.4.

8　博物館の門に、この文言が掲げられていた。

9　ヘルベルト・フロイデンタール（Herbert Freudenthal）によれば、”Volkheit”の語はゲーテが“Kindheit”を参考にして、”Volkstum”に代わるものとして造語したと言う。

ハーネによって執筆され、1919/20年にから演じられるようになった＜ハレの年間催事＞では、＜年間のできごとを自明のこととして体験する＞ことに主眼がおかれた[10]。

自然のなかの変わることなき回帰を再認識し、数千におよぶ父祖の遺産を回顧することによって（自己を養うべし）。

エスノグラフィーのトランクに詰まっているのは、自然と文化の混ぜ物で、しばしば自然らしさというアース線やそれぞれの地域性の原像が付随しており、それらが日常をめぐるディスクールのなかで、ここぞとばかり放電される。1982年にベルリンのクロイツベルクで、『村々は都市のなかで生長する』というタイトルの本が刊行された[11]。私たちの専門分野の文化人類学ヴァージョン[12]のなかで一再ならず等身大を超えたものとなったのは、村落の文物をまざまざと提示することであった。たしかに、グローバリゼーションの掛け声を聞けば、逆にスローな行き方への知的な試みや、自己情念やローカルな地域感覚への試みへの共感が起き、さらにグローバリゼーションの影響の圏外に身をおく手立てにシンパシーを感じるのも分からないではない。しかし、そうした自己満足的な村落モデル、すなわち文化人類学の遍在的な構成素ともなったモデル的な村落像は、実際にはきわめてうさん臭いところがある。事実、建築哲学において、アメリカ・インディアン風の小屋の原像となったのも、つまるところ、これであった。シュトゥットガルトのダイムラー＝ベンツ社の社屋の一部で300人がはたらく極度に透明なガラス作りの博物館は[xii]、そうした発想のオフィス・ビルへの応用に他ならなかった。

人間の（第二次の）自然としての文化、これについてニーチェは、人間を＜固定されない動物＞と呼び、またアルノルト・ゲーレン[xiii]は＜本能にし

10 Hans HAHNE, *Vom deutschen Jahreslauf im Brauch.* Jena 1926, S.9.

11 Klaus JARCHOW (Hg.), *Dörfer wachsen in der Stadt. Beiträge zur städtischen Gegenkultur.* Alpen 1980.

12 Erika HAINDL, *Soziokulturelle Zentren in der BRD / Stadtteilarbeit und Dorferneuerung. Welche Rolle spielen alte und neue Formen der Volkskultur?* In: Münchner Streitgespräche zur Volkskultur. München 1990, S.38-41.

ばられた欠陥ある存在＞と指摘した。人間は、そもそもの初めから＜自然から＞生じ、人工性と歩みを共にしてきた。すなわち文化と文明に依拠してきた。文化を通じて、人間は自然に形をあたえ、また改造する。それゆえ自然があるがままの姿ではなく、歴史的世界や現今の世界事情においてどう見え、どう理解し、どう意味づけるかが問われよう。また対象設定と主観措定において自然はどう写しとられ、どう表現されるかが問題となる。私たちの問いかけの地平を特徴づけるのは、これ以外ではあり得ない。そこでは、自然と生物学、すなわち遺伝子が、人間の決定因子として存在するのかも知れないが、その作用が私たちに及ぶのは、それらが文化に転換してはじめて起きるのである。人間の自然としてバイオロジーを理解すること、私たちのパースペクティヴのなかでは、それも文化の一場面である。このパースペクティヴは、あらかじめ選択された局面によって規定される。自然は、私たちにはセカンド・ハンドによってのみ供されるのである。セカンド・ハンドの自然、そこには文化的なものという色眼鏡がとことん掛っており、それを通してしか物は見えてこない。

人間は、（反省を知った生き方を永くつづけて）自然を儀式として企画する。都心でも、マーケットが開催される日々には、取ってつけたように田舎風の息吹がたちこめる。緑あざやかな葱の束を、女性だけでなく、男性たちもまた買い物かごから覗かせている。マーケットを行き交う人波は儀式的な自然の舞踏である。地元の言葉が口をついて出て広がり、顔と顔が合い、生のコミュニケーションの趣が生成する。卵の紙パックを持参して茶色の卵を入れてゆく。少し前なら編んだ籠やジュート製の袋に青物を入れていたが、それを革のバッグやリュックサックにつっこんで、しかもちょっとのぞかせるのは、一種宗教的な振る舞いですらある。ドイツ人のリュックサック姿、と言うより今ではそれが世界的になっているであろうが、リュックが若者文化を抜け出て大人の装いにまで上昇した過程は、これはこれで独自の研究テーマになることだろう。

モダンのなかにあって、自然は、あれこれの経験に食傷気味となった果ての文化的な発明品である。ちょうど音合わせの最初の音を出すような調子で、人々は自然を口にする。しかもそこには時を追って細やかな思いがこめられ、愛情と言ってもよいほどにまでなっている。＜自然な＞感覚と

して知覚され、そう表現される情愛の如何、とは、何を自然と呼ぶのか、ということでもある。それを問うことへの燃えるような希求もみられるが、それまた私たちの情動としては極めて新しい時代になってからの案出であった。両者とも、人間なくしてはあり得ないものであり、また＜デモクラシー化された＞姿勢となれば、たかだか250年を閲するにすぎない。どちらも人間の着想であり、人間の文化の一部である。自然は、文化的なイメージのカノンのなかに取り上げられるようになって以来、メタファーとして機能している。言い換えれば、外界に対する人間の関係、また人間の自己自身に対する関係の文化的な解釈モデルの役割を果たしている。これがいつ始まったかについて、カントは1787年にこう記した[13]。

> （それは人間が、）人間こそが自然の目的であることを（たとえ漠然とであれ）把握したときであった・・・。人間が羊に向かって語った最初の言葉は、お前がまとっている皮は、自然がお前のためにあたえたのではなく、俺のためにだ、であった。そして人間は、羊から皮をはぎとって、自分の身にまとったのだった。

自然＜だけでは＞アプリオリな実態としては考えられることは難しい。自然は、関係史として文化学的に意味解きされる。＜疎外＞（Entfremdung）の語がたどった経緯は、事実として、＜市民的・資本主義的社会秩序の神経にさわる＞[14]現象であろう。エコノミーを別にすれば、この語の受容において野生性がつよまる様子は、他でもなく、自然からの疎外の記述に集中的にあらわれる。自然とは何であり、また自然らしさとは何か、これを決めるのは常に人間である。そうした自然が存在するのは、人間が周囲の世界の一部を＜自然＞の語で名指すがゆえである。またそうした発見の歴史のなかで中心的な役割を果たしたのは、知的な解読エリート、すなわち哲学者や神学者や藝術家や政治家や科学者であった。彼らは、自然を、人間によって形づくられ改造された環世界の反対項目と解してきた。ラルフ・

13　Immanuel KANT, *Mutmaßlicheer Anfang der Menschheitsgeschichte.* 1787.
14　Joachim RITTER (Hg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd.2.* Basel / Stuttgart 1972, Artikel: Entfremdung, S.295.

リントン[xiv]はそれを端的に言いあらわした。

環世界の、人間がかかわるパーツ。

解釈者はまた、かなり新しい時代になってからではあれ、自然を＜文化＞（Kultur）と名づけもした。ノルベルト・エリーアス[xv]が文明（Zivilisation）の名称をあたえたものでもあるが、それはただちに＜文化＞と読みかえることもできる。文化は、＜自然＞をめぐる思索でもある。

文化としての自然

かかる思索のなかで、人間は自然の名の下に、他のあらゆるもの、良きもの、全体そのものを理解してきた[15]。人間が自己を自然の一部と解するとき、人間は常に不完全なものにとどまり、他方、＜緑の自然＞は藝術作品総体に擬せられることすらある。解読者は、自然について語るとき、人間の加工（したがって文化）を原理的にすり抜けたもの（あるいは定言的命令としてすり抜けるべきもの）を思い浮かべる。自己自身に発して、ずっと常に存在するもの、である。自然あるいはその部分は、独自の主体と理解されることも少なくない。解読は日常活動へと入ってゆき、微細なゾーンにたどり着く。

我が友、樹木は死んだ。

こう謳ったのは、流行歌の歌手アレクサンドラ[xvi]だった。実際、彼女の人生は、ホルシュタインの樫の根元の奇禍で終焉を迎えた。また人間が自然そのもの同じくらい愛してきた自然な生き物は犬であろうが、これはグロー社の絵葉書にまでなった。それに付けられた文言もある[xvii]。

私には犬がはるかに好ましい、とお前は言う。おお人間よ、何と罪あることよ。動物は嵐のなかでも私に忠実だったが、人間は風が吹くだけで

15　人間の自然（本性）となれば、底なしの悪もまたあり得よう。

そっぽを向く。

ジョージ・オーウェルの『アニマル・ファーム』[xviii]では、反乱を率いる豚の老頭目が呼号する。

人間、これが我らのただ一つの宿敵だ。

自然は、人間の定義能力ある慰謝の主体として生きつづける。ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー[xix]の表現もそれに触れている。

魔法の夜、母なる自然よ、私はそなたに祈る！

さらにジャン＝ジャック・ルソー[xx]は、自然を＜母さん（ママさん）＞と呼んだことがあった。これらの人々は、自然を、それと対比してアイデンティティを描くための異質なものとして活用した。同時に彼らは、自然のなかに、失われた超越と大きな連関を感じとった。彼らの想像力のおもむくところ、絶えず存するもの、ずっと続いていながら繰り返し封じ込められるモラルを自然のなかに感じとったのだった。放棄された神に代わるもの、と言ってもよいくらいである。今日、多くの人々にとって自然は教師となっている。非理性的な人間に比べてはるかに理性的なパートナーとなった、それゆえ偏に自然に耳をかたむけることを学ばなければならない、とも言う。マリーア・トレーベンの『神の薬局』[xxi]への帰依、すなわち古き良き時代への歩みは、正にそのインデックスである。またヴォルフ・レペニエス[xxii]は歩むべき道をうながした　－　自然と共にあるとき、私たちは新しい姿勢をとり、学習共同体をかたちづくる、と。そればかりか、人間は、八方ふさがりのなか、我と我が身を自然にゆだね、その法則を＜意味あるもの＞として受納する用意を見せている。自分たちが認識しようのないものに盲目的な信頼を寄せ、そこに救済計画を望み見て邁進する。しかし、それすら、まったく新しい現象とも言えないところがある。早くアルブレヒト・フォン・ハラー[xxiii]は謳っていた。

ここ、自然が万物に法則をあたえる場所。

私たちは混沌(カオス)のなかに生きていると思いこみ、それに対するに、日常の議論のなかでも自然を措定する。なぜなら、昆虫学者エルンスト・ユンガー[xxiv]にも似て昆虫に昆虫をかさねて規則を立てるように（規則の自己目的化と言ってよい)、自然は、信頼し得るのみならず、前提としての秩序の現存の如くだからである[16]。

私たちは自然のなかに生命の法則を推測し、それによって負荷を軽減される。なぜなら、私たちは生命の法則を厳密には知り得ないものの、法則が存在することとその法則が定めし良きものたらんと知ることを願うからである。さらにその法則は破ると罰せられるものであることをも確めたいと願っている。自然は自立した主体として＜自衛し＞、それを乱すものは報いを受けずにはおれない。過失は人間の側にもとめられる。これは、自然を逸脱した人間の不安、現今の不可測を前に普遍そのものとも言えるほどの不安に根差している。それゆえ､原子力発電所やゲノム･テクノロジーをめぐるディスクールも自然乱用のコンセプトに入れられ、倫理問題に分類される。そしてこれまた、自然を道具としている面がある。

その伝で口にされることでは、＜システム・シンキング＞[xxv]も同じであろう。たとえば中国で一匹の蝶が羽ばたいたことが地震につながる････。＜ネット化＞もそこに加わる。一例を挙げれば、マクドナルドの相互依存ネット － 酸性雨 － 肉牛飼育 － 気象 － 第三世界。かかる蓋然的な連鎖が有責とされてきた。モダンのなかでは、蓋然性が重要なものとなるのである。

ここでの蓋然性とは、言い換えれば、人間が、その理解能力を自然のための尺度とすることである。自然法則の現存という考え方、また救出に向けた想像のはたらきは、厳密な規定の総体としての自然はそこからはこぼれ落ちるにもかかわらず（あるいは、こぼれ落ちるからこそ)、人間らしい行為となる。自然は、隠れた、それゆえ恵みが期待できる謎でありつづける。かかる自然の概念にはアプリオリが含まれている。同時に、解釈も

16　Jean BAUDRILLARD, *Das System der Dinge.* Frankfurt /M. 1991.

予測も記述可能性も入っている。そこで、自然は距離と相違の表現となり、それゆえアイデンティティの形成に役立つかの観を呈する。

自然は他者であり異質な何ものかである。そうした自然を名指して呼ぶようになったのは決定的な転回であったが、これまた精々250年前からである。自然への関心は見かけの上では昂揚を呈し、またパラドックスながら＜自由な＞という装飾語を得ることによって厳密にもなった。もっとも、＜自由な自然＞という言葉には、自然の自由、すなわち人間の作用力から自由な（＝束縛されていない）という意味での自由は強く現れてはいない。むしろ、人間に無制限な自由裁量を供するような性状が自然に帰せられることを言い表しているほどである。またそれによって、非自然、がんじがらめ、非自由、それも歴史的には特に都市に対する対立物たるべく振付をほどこされた相貌、ないしはその方向への類型的な相貌をとる。自然は、理念としては、意味づけの仕組みが行った先行解釈に支えられ、また先行解釈を通した経験の裏打ちを得てはじめて、考えることもできるものとなる。

＜自然＞の文化史から

近代になっても、なお都市は狭く建てこみ、市壁に囲まれた居住地には樹木や緑はほとんど見られなかった。最も簡単な文化的テクニックである花束ですら、ヴォルフガング・ブリュックナー[xxvi]の研究が教えるように、市民社会の営為としては短い歴史しかもっていない。それだけに、19世紀に自然と田舎がロマンティックなものとなったのは、息を呑むような役割の転換であった。田舎の諸条件が＜自然な＞と知覚されるようになったのである。市壁や土手が削られ、市門が取り壊されたとき、その跡地に緑地帯やリング状公園や遊歩道が設けられたのはシンボリックである。

括りだされた自然　－　人を不安にし、しかしまた魅了しもする野生がそれであった。次いで平凡な田舎が自然とみなされ、最後に森がやってきた[17]。森が話の舞台となる昔話や伝説は、それを示している。森には、また＜野生の人間＞も配置された。しばしば英雄的な姿をとるロビン・フッドのごときアウトロー、すなわち聖譚と現実、影絵とリアリティのあいだに

17　Albrecht LEHMANN, *Von Menschen und Bäumen. Die Deutschen und ihr Wald.* Reinbek bei Hamburg 1999.

根を下ろした放恣な人間たちの居場所が森になった。彼らの王国としての森については、ヴォルフガング・ザイデンシュピンナー[xxvii]が手短く論じている[18]。そうしたお縄頂戴者たちが、特権者ででもあるかように羨まれるようになっていった。自由で因習に縛られない存在とみなされた彼らは、森のなかで、野生のおもむくまま、いかがわしい、エロティックな、そして自由な所業にふけっているのだった。レーゲンスブルクやバーゼルに保存された中世の絨毯に織り出された野人たち、そのシンボル的な姿には、市壁や城壁に囲まれた境域、すなわち都市や城郭のなかでは考えられないような自然らしさが束になって投影されている。これは、アードルフ・シュパーマー[xxviii]とフリードリヒ・フォン・デア・ライアン[xxix]の研究成果が教えている[19]。

野人の生きざまは、宮廷的な遊びの対象となった。いかにも自然な野生と衝動性は、宮廷や都市で、またカーニヴァルにおいて演じられた[20]。それは、1384年の＜燃える舞踏会＞[xxx]についてヘルマン・バウジンガー[xxxi]が指摘した通りである[21]。そうした遊びのなかで、人間は別の存在になっていた。皮衣や枝葉を身にまとい、異人や無法者や渡世人の仮面をつけて、＜因習のコルセットを＞[22]すり抜けようと試みたのだった。

野生の型と化したそうした自然は、宮廷世界の対極となった。かく解されたのは、地滑り的な変動をきたした自然だった。それは、整った規則から成る生活世界がおびやかされかねない怯えの感覚を惹き起こすと共に、羨望への傾斜をも解き放つありとあらゆる異質なものに近似した。かくして自然は、不安と讃嘆のあいだに位置を占めた。それゆえ自然は、先ずは、異質であり、謎であり、見通すことができない何ものかであった。人間が自然と一体であったとか、あるいは今も一体である、といった原初的に親

---

18 Wolfgang SEIDENSPINNER, *Mythos Gegengesellschaft. Erkundungen in der Subkultur der Jauner.* Münster u.a. 1998.

19 Friedrich von der LEYEN / Adolf SPAMER, *Die altdeutschen Wandteppiche im Regensburger Rathause.* In: Das Rathaus zu Regensburg. Regensburg 1910.

20 Hans-Ulrich ROLLER, *Der Nürnberger Schembartlauf.* Tübingen 1965 (Volksleben, 11).

21 Hermann BAUSINGER, *Volkssage und Geschichte (Die Waldenburger Fastnacht).* In: Württembergische Franken, 41, NF 31 (1957), S.107-130.

22 Norbert ELIAS, *Die höfische Gesellschaft. Untersuchungen zur Soziologie des Königtums und der höfischen Aristokratie.* Neuwied u.a. 1969 (Soziologische Texte, 54).

しい透明な自然ではない。自然が、失われた創造的な野生に憧れる安住者の前に、その憧れに応えて屹立するようになるのは、その後のことである。

> アドレナリンの壜をどうこうするだけの話ではない。共にいそしむ大課題。

それこそが責務だ、と、学校の生徒たちにアウトドア・プログラムを提示する登録団体「自由空間」は表現する。しかも、音頭をとった一人は、思案顔に口をさしはさむ。

> 自然という背景画は、日常の諸問題のように簡単に抜け出すことができないセット。

そして、こうも言う[23]。

> しかし逃れられるすべのない課題（がひかえている）。山の頂上に立った以上、ふたたび降りるほかないわけだ。

はめ込む絵の取り替えが利く額縁さながら、現代の大都市は、かつて野生とみられていた田舎の特質を唖然とするほど取り入れている。今や田舎は、＜民俗世界＞[24]の場として、伝統的で変わることのない暮らしや、つつましく、それゆえ見渡しのきく巣のような隠れ処となっている。そして、そうした確かさに＜民のいとなみ＞[25]という枠をはめてせっせと絵筆を揮ってきたのが、他でもなくフォルクスクンデ（民俗学）であった。それ以来、今日にいたるまで、大都市は、人を惑わせ、病で苦しめ[26]、カオスの如く野蛮で、見渡しがきかず、人間に危険な場所となってきた。そこでは盗みや物品の横流しが横行し、売春と犯罪がはびこっている。子供までが悪事

23 Heidi WEINHÄUPL, *Outdoor – die Natur als Kulisse.* In: Der Standard (Wien) vom 7. Sep. 1999.
24 Josef DÜNNINGER, *Volkswelt und geschichtliche Welt. Gesetz und Wege des deutschen Volkstums.* Berlin / Essen / Leipzig 1937, S.543.
25 Konrad KÖSTLIN, *Sicherheit im Volksleben.* Phil. Diss. München 1967.
26 Heinrich HANSJAKOB, *Unsere Volkstrachten. Ein Wort zu ihrer Erhaltung.* Freiburg 1892.

に走るのは、決して第三世界のスラム街だけのことではない、と言う。

＜都市の空気は自由にする＞とは、古い言い回しである。それは農奴制を免れた空間を指しており、逆に田舎の空気は人間を羽交い締めにしていたのである。わずかな行動ですら土地と地主への結びつきが前提でなければならず、地主の承諾なしには、いかなる流動性もあり得なかった。しかし、やがて土のイデオロギーが現れた。人間を根生いの存在と解し、ふるさとは何にもまして根付きのメタファーによって説明されるようになった。あたかも人間が樹木ででもあるかのように、それゆえ地域への根付きの情感を不可欠とするかのように説くのである。しかし人間がそなえているのは、根ではなく脚である。

いたるところでローカリズムが頭をもたげ、そうした日常感覚にキイワードをあたえるべくエスノ関係の諸々の学問がもてはやされる。最近『ツァイト』紙が掲げた見出しはいみじくも、それを物語っている[27]。

遥かなるふるさと学　－人類の子供部屋を周遊するサファリ・ツァー

アフリカへの誘い、すなわち人類が二足歩行を始めたとされる土地に焦点を当てているのである。連続性のヴァージョンを追いかけるポピュラーな深海探索艇、そして動いてやまないはずの海に錨を下ろす　－　それが、ふるさと学である。それは足跡探しにほかならず、立ちつくすことができる場所、いわば墓標の物色である。長期持続、メンタリティ、地域特性、そして追憶記念地[xxxii]という強烈なナショナリズムの道具立て。

まとめると、こうなるだろう。私たちにとって、自然それ自体は存在しない。自然は常に規定され、飼い馴らされ、調整されたもの以外ではあり得ない。それは、自然の野生性にも鎮静分泌物（エンドルフィン）の解発にもあてはまる。自然は、それ自体としては、良きものでも悪しきものでもない。自然は常に、人間がそこから作り出すものとなる。自然は、そこから社会的なルールを導き出したり聞き取ったりできるものではない。自然のなかに法則をもとめる人は、その法則に従うことができるが、生命の意味を自ら創り、見出

27　Stefan SCHOMANN, *Eine ferne Heimatkunde. Auf Wandersafari in Ostafrika durch die Kinderstube der Menschheit.* In: Die ZET (Reisen), Nr. 37 vom 9. Sep. 1999. -----

す自由をあきらめる。

課題

私たちが生きている社会はマルチ・オプション社会[xxxiii]と言われることがあるが[28]、これを前にしても、だからと言って＜振る舞いの柔軟性＞が無制限ではあり得ないという指摘も正しい[29]。多様な諸々の文化も、共通の基盤をもっていると言ってよいかも知れない。もとより文化は、かつてエルンスト・シュレー[xxxiv]が語ったように、＜秩序の構築＞でもある。ちなみに「フォイエルバッハに関するテーゼ」（マルクス）[xxxv]の第十一項は次のように謳われる。

> 哲学者は世界を解釈してきたにすぎなかった。しかし大事なのは世界を変えることである。

私たちが自分の経験からも知るように、変化は解釈によって生起する。あるいは、かくあるはずと思い定めた現実を生産することによって変化する。それゆえ世界を多種多様に解釈し、それを通じて変えることも大事であろう。なぜなら人間は文化の原因者であるばかりか、自然について物語る語り手だからでもある。実際、自然は人間をつまみ食い的につかまえて語り手に仕立てるのではなく、文化の構成素にして文化のお墨付き、したがって文化が現にあるすがたの構成素そのものである。

オーストリアの副首相をつとめたエアハルト・ブーゼク[xxxvi]は、コソヴォ担当の全権委員だった当時、談話のなかでこんなことを口にした[30]。

> ゲノム・プログラムからすれば、私たちはバルカン半島に相当近い位置にあると思います。

---

28 Armin PONGS (Hg.), *In welcher Gesellschaft leben wir eigentlich?* München 1999 (Dilemma-Verlag).

29 Karin SCHÄFFER / Klaus ATZWANGER, *Individuelle und kulturelle Vielfalt im Verhalten. Eine humanethologische Studie.* In: Irene ETZERDORFER / Michael LEY (Hg.), Menschenangst. Die Angst vor dem Fremden. Berlin / Bodenheim b. Mainz 1999, S.19-32, hier 20.

30 Interview mit Erhalt BUSEK, *Der Balkan muß in die EU.* In: Format (Wien) vom 21. März 1999, S.56f.

そこで副首相が念頭においていたのは、オーストリアが文化的にバルカン半島に近いことが歴史のなかに根拠をもつことであったろう。それは、生物学的な特徴の蓋然性が明瞭であるために、文化のカードを切ることが必要だったからでもある。ちなみに、ウィーンのある売春宿で、56歳の女性がもらした述懐がある[31]。

女は、犠牲になるために育てられるんだよ。

すると、35歳の女性がこう答えた。

私はそうじゃなかった。けれど、どの女にもそういうところがあるわね。

人間に自然な性状であるところの攻撃性、もっともそれは精子を発散するべく陣取りに走る男性においてより強くみられ、それゆえ男性にあっては遺伝的に貞節が不可能ともされる。片や女性も解放への志向を近年つよめているが、歴史的には女性の不貞はマイナーであった。雑誌の投稿などにも、そうした感想がにじんでいる。緑の党が紛糾していた頃のある女性読者の声もそうである[32]。

ヨシュカ・フィッシャー[xxxvii]の強烈な、男性の発露そのものといった経歴、私たち女性のなかにも真似しようとする人が沢山いるけれど、結局、女の平和な持ち味をずたずたにされるだけね。

女性は生物学的に＜別の＞存在で、違いは男の戦闘性にある。もっとも、逆に、男女は本来等しい存在であるとしてしまえば、それで決着がつくかも知れない。それはともあれ、人間が発生においてすでに軌道を敷かれ、生物学的に先天的に決められ、あるいは（ドイツ人の場合で言えば）部族の歴史を歩むことを運命づけられている、といった議論にはいかなる重み

31　Claudia DANNHAUSER,“ *Es kann nicht sein, daß ein Mann mit einer Frau macht, was er will”*. In: Die Presse (Wien) vom 24. Sep. 1999.
32　Süddeutsche Zeitung vom 24. Sep. 1999.

もあり得ない。大事なのは、何をなし得るかである。すなわち、自然と呼びならわされる不変（とされる）ファクターの桎梏をどれほど克服するか、またそこにどれだけのものを積み上げるか、である。それは取りも直さず、文化を通じて、すなわち人間が作り出すものを通じてである。制約から自省へ、ということでもある。そこでは、フォルクスクンデ（民俗学）が何をなし得るかも問われよう。フォルクスクンデも一枚噛んでできあがった意味づけが延命するのを批判的に解体すること。しかしそれは、現実を否定することではない。たしかに現実の構築について語ったとて、それによって世界がより現実味を弱めるわけでもなかろう。しかしそれは、新しい現実について見取り図を描き、議論し、そこで社会と生き方の現実をそこで変えるチャンスを供することにはなるであろう。それは、社会的営為としての学問を手がけること以上であり、より困難でもある。こう言ったからとて、早とちりに陥りかねないような文化的営為をかばおうとしているわけではない。記述される対象が、正にその記述によって、すなわちそれを論じることによってどれほど根拠づけを得ることか、これに思いを致す刺激になることをねがうのである。

私たちが文化として解釈的に知覚するところのもののなかに生態学的なものや部族史的なものが蓄積しているとすれば、それを直視するのは間違いなく課題になる。しかしそこから一直線に議論が伸びるわけではない。なぜなら、私たちが試みるのは、人間の振る舞いの文化的側面だからである。したがって、生物学的な疾病素質に抗うような論議には踏みこまない。またそれを議論しないのは、疾病素質などは存在しないと考えているからではなく、文化は人間の（第二の）自然という見方を出発点とするからである。それに、生物学的な疾病素質があったとて、それを文化的に作りかえ、新たに語りなおし、編成替えし、物語に組み上げ、あるいは文化を通じて除きさえする、これが課題だからである。生物学的なものを否定するところまで進むとしても、それまた（おそらく間違いなく）文化の一部であり、人間存在に立脚した行為の一部である。私たちは、人間が自己の不変な部分とみなしているものについてすら、少なくとも論議の外には放置しないでおこうと思う。

筆者が強調したいのは、私たちがなし得るものとは何か、である。たと

い、表現形態としての言語とわざ（クンスト）では世界をとらえ切れないと感じているとしても、また私たちのメタファーのなかでは真実と非真実が＜ほどきようもなく絡みあっている＞ことを予感してはいても。－　それは正に、ローベルト・ムージールの『特性の無い男』[xxxviii]の主人公ウルリッヒが認識したところでもある。すなわち、身体はシンボルの野として探られ、またそれ自体では表出へと向きようのない何ものか明るみに出すべきとしたときに。－　言い換えれば、文化と呼ばれるパーツである。それは、疾病素質や衝動や先天的条件に対抗して人間が取り組むものであり、それを分析するのである。日常、人間存在、人間がかかわる事物世界、そして習俗、これらについて語ることによって紡ぎだされる数々の事象。

もう一度まとめよう。生物学的なばね仕掛けがあって、それが人間を洞窟へ降りたり山登りへといざなったり、また男たちを逸らせたり、周囲に警戒の目を向けさせたり[33]、さらに野外で肉を焼いたり魚を釣ったりするといったことは男性的なイメージになるのかも知れない。ネズミのようにあわてふためくことがなければ、それゆえ＜ボートはいっぱいだ＞と言い放って異質な者の割り込みをはねつける権利を持っているのでもなければ、人間がミニマムの居場所を必要としているのかどうか、を問題にする必要もない。実際には、ボートは、すこぶる弾力性のある＜文化＞という船底をそなえている。さまざまな文化があり、そこにはさまざまな希求や空間活動があることを受け入れるのは、人間にとってアプリオリと言ってもよい。＜せまい＞と＜ひろい＞、これは、人類学の定数ではなく、文化に特化した空間知覚の表現である。サイズがその都度変わることも、そこには含まれようが、サイズを私たちは、文化の染み込みを測りつつ解読しようとする。なぜなら文化という色付けがなければサイズもあり得ないからである。私たちは、文化的な諸々の様相を、歴史の推移のなかで習得されたもの、すなわち文化特性として記述する。ちなみに、ジークムント・フロイト[xxxix]によって、男性の愛が、後天的で矯正可能な心的疾患と解され、それによって心情不安な多くの共感者を得たのだったが、私たちにとってはこの側面はそう重要でもない。私たちが関心を寄せるのは、むしろ、か

33　Bernd Jürgen WARNEKEN (Hg.), *Der aufrechte Gang. Zur Symbolik einer Körperhaltung.* Tübingen 1990.

かる裏打ちがありながらも日常活動として、自明のことがらとして形成されてきた生活世界である。

駆け足ながら、まとめである。フォルクスクンデ（民俗学）は自明なことがらにかんする学問であるが、その成立は、他でもなく自明なことがらが終末を迎えたことに負っていた。日常性が学問の祭壇に供えられるところでは、それを際立たせていた当のもの、言を待つまでもない特質としての日常性が失われる。以来、私たちは、文化研究の俎上に上った日常のなかにありふれたものをもとめて光を当て、ありふれたもののお話をつづけてきた。日常学がライトをちょっとずらすと、ありふれたものは特別な何ものかに変えられてゆく。学問が問いを投げかけるや、儀式であれテューリンゲン地方のソーセージであれ、研究のために取り出した当のものを破壊してしまう危険が生じる。危うくなるのは、日常的なものごとの日常性そのものである。自然への私たちの姿勢も日常のひとつだが、それも変えられ、読みかえられ、新たに意味づけされる。とは言え、

> 新たな何物かはまだ場所を定めてもいず、逆に、差し押さえられてもいない。

これは、かの厳密なアドルノ[xl]が文化産業を例にとって残した記述である[34]。そこでは、今日のモダンの儚なさ、つまり移ろいやすさも示唆されている。モダンを起用する歴史は常に使い捨ての歴史でもあることが看破される。

これを前にしては、成功者の魔法の言葉であるイノヴェーションも顔色無からしめられよう。それゆえまた（イノヴェーションは）、（レギーナ・ベンディクス[xli]が私たちの専門分野の出発点と指摘したように）本ものの検索が[35]所詮落ち着き先のない無い歩みに終わるのを覆い隠すことでもある。かかる自省も私たちの命運であろう。と同時に自省的とは、取りも直さず＜演出されること＞でもある。たといそこに悪意が無く、不法なものが無く、文化的な実際行為であるとしても　－　とは、ギーゼラ・ヴェル

34　Theodor W. ADORNO, *Resumé über Kulturindustrie.* In: DERS., Ohne Leitbild. Parva Aesthetica. Frankfurt / M. 1967, S.60-70.

35　Regina BENDIX, *In Search of Authenticity. The Formation of Folklore Studies*. Wisconsin 1997.

ツ[xlii]の指摘である[36]。マネジメント・トレーニングも通過儀礼[37]も過ぎゆくだけでなく、意味づけされ志願されるときには、そうである。責任から逃れ、集団と縁を切り、キャンプ場に滞在し、そして新しい人間として戻ってゆく。

人間は、人間としてはじめて自己発見するしかない。デモクラシーの進展という難しい、しかし不可逆的な状況のなかで、啓蒙主義としてのモダンが人間にこれを負わせ、またそれと共に自己を正統化する道を課したのだった。そこでは、創造と自律への暗号として＜民俗文化＞も役割をはたすことができる。社会のモダニゼーション、そこには私たちの専門学が固執低音（バッソ・オスティナート）さながら寄り添って不平を言い立てる役目を買って出ている。しかし私たちの専門学（民俗学）が誕生したのは他ならぬモダニゼーションのお陰であった。そして多くを手がけてきた。小言を言ったり、嘆いたり、感じたり、そして何よりも文化研究を担当し、またそれが潤いをもたらすがゆえに正統性を自認してきた。その姿は、さしずめヴィルヘルム・ブッシュ[xliii]と一緒に「キルメス（秋祭り）」を物語る体のものでもあろう。

気弱なコンラートは離れてたたずみ
事態はお構いなく進んでゆく。

訳注

i　国営コンベヤー・クレーン製造会社ケーテン（Kollektiv ÖZ / ÖIN des „VEB Förderanlagen- und Kranbau Köthen“）：Volkseigener Betrieb（国営企業）旧・東ドイツの国営企業；「持続可能な発展のためのインスティテュート」（ÖIN＝Österreichisches Institut für Nachhaltige Entwicklung (Lindengasse .Wien)

ii　花のデザイン：1999年にザクセン＝アンハルト州のハレで開催されたドイツ民俗学会大34回大会のロゴマーク。本稿への訳者の解説にモノクロで収録した。

iii　ヘネス・アンド・マウリッツ社（Hennes and Mauritz）：スウェーデンのアパ

36　Gisela WELZ, *Inszenierungen kultureller Vielfalt.* Frankfurt(M) / New York City 1996 (zeithorizonte, 5).
37　Andreas C. BIMMER, *Vom Übergang zu Übergang – Ist Van Genepp noch zu retten?* In: Österreichische Zeitschrift für Volkskunde, 54: 100 (2000), S.15-36.

レル・メーカーで小売大手。1947年に同国中部の都市ヴェステロースで創業し、現在の本社所在地はストックホルム。そのブランドはH&Mで、低価格でありながらファッション性をもつ衣料品、すなわちファースト・ファッションとして知られる。

iv　民俗文化（Volkskultur）：民俗文化とも民衆文化とも訳すことできる。ドイツ語では“Volk”という一般語に問題があることをこの合成語もひきずっている。“Volkskultur“という括り方の当否も含めて常に問題となるが、また批判を含めつつ、学術的な結節点として留保つきで使われることは、ヘルマン・バウジンガーはじめ多くの研究者にみられる。

v　ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール（Wilhelm Heinrich Riehl 1823-97）：ビーブリッヒ（Bibrich現在はヘッセン州ヴィースバーデンの市域）に生まれ、ミュンヒェンに没した文筆家。三月革命を経験して、保守的な改良主義に向かい、バイエルン国王マクシミリアン２世に呼ばれてミュンヒェン大学で多彩な文化論を講じた。ドイツ民俗学の学史では、グリム兄弟の弟子たちによる神話学系統の民俗研究に対して、現実と社会関係を重視するリアルな視点を表明したことによって不滅の位置を占める。文筆に秀で、ロングセラーとなった著作も多い。

vi　民のたましい（Volksseele）：民俗事象や民衆文物の奥にある根源的なものとしてロマン派の詩人・思想家によって強調された概念。グリム兄弟は代表者でもあった。“Volk“の語を中心にした合成語として、漠然とした名指し方にもかかわらず、19世紀を通じてドイツ文化では実感をもって感得されてきた。

vii　長期持続（longue durée）：フランスの歴史家フェルナン・ブローデル（Ferdnand Braudel 1902-85）が地中海世界を対象にした歴史理解において措定した概念。大きなタイム・スパンをとり、過去を認識する独自の形式として、地理学によって把握される事象の重層性とエコロジーを結合させる観点から、イスラーム圏をも含む地中海をかこむ諸々の文化圏が総合的に観察され、部門ごとの変化の時間差を組みこみつつ、基本的に動きを長期的なトレンドを主要に検討することによって理解された。ブローデルはいわゆるアナール派の中心的存在であった。

viii　ヴォルフガング・エメリッヒ（Wolfgang Emmerich 1941-L）：ケームニッツに生れ、1958年に西ドイツへ移住して、フライブルクやケルンで学んだ

後、1968年にテュービンゲン大学のヘルマン・バウジンガーの下で学位を得た。学位論文『ゲルマン的フォルクストゥーム・イデオロギー：第三帝国における民俗研究の生成と批判』（*Germanische Volkstumsideologie: Genese und Kritik der Volskforschung im Dritten Reich*）はその時代のドイツ民俗学では一方の見解の代表するものとなった。次いで上梓した新書版『フォルクストゥーム・イデオロギー批判』（*Zur Kritik der Volkstumsideologie.* 1971）は、学園紛争の時代思潮とも重なって賛否両論を誘発した。1971 年に新設のブレーメン大学の助教授となり、1978年に正教授となった。1988年にブレーメン大学に文化学的ドイツ研究インスティトゥート（Institut für kulturwissenschaftliche Deutschlandstudien IFKUD）を設立した。

ix　＜ナイーヴな＞文学（素朴文学）と＜センチメンタルな＞文学（有情文学）･･･フリードリヒ・シラー（Friedrich Schiller 1759-1805）の定義：シラーは南西ドイツのマールバッハ（Marbach）に生れ、ヴァイマルに没した詩人・劇作家。シュトルム･ウント･ドラングの文藝思潮に接する作風から出発し、やがてゲーテと共にドイツ古典主義文学を完成させた天才。歴史評論と美学理論においても秀でていた。この美学・文学理論は創作における二大類型を措定したものとしてよく知られている。

x　ハンス・ハーネ（Hans Hahne 1875-1935）：ザクセン＝アンハルト州ピースドルフ（Piesdorf）に生れ、ハレ（ザーレ河岸）に没した先史学者。はじめ医学を学び医学の学位を得たが、神経を病んで転身し、ベルリン大学でグスタフ・コッシナに就いて先史学を学び、後にその分野で学位を得た。ハノーファーの博物館員の後、1912年にハレ大学付属地域博物館長となった。1918年にモールブリュッケン地方（Moorbrücken東・西プロイセン境界の湿地帯）の氷河期以後の地質学的研究によって教授資格を得て、1921年に同大学の員外教授となった。次第に人種論者の要素を強め、またナチ党員となった。1933年に正教授となった。したがって、その経歴は必ずしもナチスの後押しだけではなく、時代風潮によるところがある。

xi　ベルンハルト・ルスト（Bernhard Rust 1883-1945）：ハノーファーに生まれたドイツの政治家。1930 年にナチスの国会議員となった。ヒトラー政権の成立とともに1933年2月にプロイセンの科学・教育・文化相に任命され、次いで各州の同分野が中央政府に統合されると、1934年5月1日には全ドイツの科学・

教育・文化相となった。ナチス・ドイツの敗北の直後、1945年5月8日に自決した。

xii　シュトゥットガルトのダイムラー＝ベンツ社・・・極度に透明なガラスの空間：現在の博物館は2006年にオープンした独立した建物で、これもガラスを多用した特異なデザインで人気スポットとなっているが、その前の博物館も新旧の自動車の展示という趣旨からガラスを多く用い、またアメリカ・インディアンの小屋を思わせる仕様だったらしい。

xiii　アルノルト・ゲーレン（Arnold Gehlen 1904-76）：ライプツィヒに生れ、ハンブルクに没した哲学者・社会学者。ナチス期にはケーニヒスベルク大学とウィーン大学で教授を歴任したが、戦後は保守派であったこととナチス・ドイツへの加担について、特にアドルノなどのフランクフルト学派から指弾されて、大学のポストに就くことは妨げられた。アドルノの論敵であり、また1968年を頂点とするドイツの大学紛争のなかでは批判の的となった。しかしヘルムート・プレスナーと並ぶ社会人類学者と評価されることもある。

xiv　ラルフ・リントン（Ralph Linton 1893-1953）：フィラデルフィアに生れ、ニューヘイブンに没したアメリカの文化人類学者。イェール大学教授。主著に『文化の樹』（*The Tree of Culture.* 1955）他がある。

xv　ノルベルト・エリーアス（Norbert Elias 1897-1990）：ブレスラウに生れ、アムステルダムに没した社会学者。ユダヤ系であったため1933年にフランス、次いでイギリスへ亡命した。1954年にはじめてイギリスのライセスター大学で社会学の講師となり、1962年からはガーナのアクラ大学の教授を経て、1975年からアムステルダムに住んだ。主著『文明化の過程』（*Über den Prozeß der Zivilisation.* 1933）をはじめ、歴史研究を踏まえた社会学理論に特色がある。

xvi　流行歌の歌手アレクサンドラ（Alexandrra 1942-69）：本名 Doris Nefedov（旧姓Treitz）、ドイツ人の女流シンガーソングライター。リトアニアの西方の当時はドイツ領であった地域で生まれた。服飾やグラフィックの勉学の後、音楽へ転身した。1969年6月31日にホルシュタインの交差点でトラックとの衝突事故で死亡した。ミュンヒェンの墓地に埋葬された。ウード・ユルゲンスと親しく、共同で仕事をすることがあった。

xvii　グロー社の絵葉書（Groh-Postkarten）：グロー社は、エルンストとベルンハルトのグロー兄弟（Ernst und Bernhard Groh）が1928年にミュンヒェンで写真

館と共にグラフィックの専門出版社として創業し、今もポピュラーならグラフィック商品を多彩に手がけている。

xviii　ジョージ・オーウェル（George Orwell, 本名Eric Arthur Blair 1903-50）の『アニマル・ファーム』（*Animal Farm*）：オーウェルはイギリス植民地時代にインドのビハール（Bihar）に生れ、ロンドンに没した作家。1945年に発表された『動物農場』は代表作の一つ、他には全体主義的な未来社会を描いた『1984年』（1949）も有名である。

xix　ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried Herder 1744-1803）：東プロイセンのモールンゲンに生れ、ヴァイマルに没したドイツの啓蒙主義の思想家。文芸評論において新機軸があり、初期のゲーテを含む文学運動＜シュトルム・ウント・ドラング＞の形成に大きな影響があった。特に青年期に天才を発揮した。思想史的にはロマン主義思想の先駆者の面があるが、それにとどまらず共同体的存在としての人間を考察したことにおいて原理的な思索をおこなっており、ジャンバッティスタ・ヴィーコと並ぶ思想家でもある。

xx　ジャン・ジャック・ルソー（Jean-Jacques Roussseau 1712-78）：スイスのジュネーヴに生れ、パリに没した思想家。作家。

xxi　マリーア・トレーベン（Maria Treben 1907-91）の『神の薬局』：ボヘミアのザーツに生れ、グリースキルヒェンに没したオーストリアの薬草専門家。ゼバスティアン・クナイプ（Sebastian Kneipp 1821-97）を範として市民医学の普及につとめた。主著『神の薬局』（*Gesundheit aus der Apotheke Gottes: Ratschläge und Erfahrungen mit Heilkrätern.*）は20カ国以上で翻訳されている。邦訳のタイトルは『薬用ハーブの宝箱：アドバイスと体験』（西村サイエンス 2000）。

xxii　ヴォルフ・レペニエス（Wolf Lepenies 1941-L）：旧・東プロイセン出身のドイツの社会学者。ミュンスター大学で学び、「メランコリーと社会」で学位を、次いでベルリン自由大学で教授資格を得、ややあって同大学（FU）の社会学教授となった。『ヨーロッパにおける知性の盛衰』（*Aufstieg und Fall der Interkulturellen in Europa.* 1992）などがあり、社会人類学を追求し、初期にはレヴィ＝ストロースの『野生の思考』をも論じた。

xxiii　アルブレヒト・フォン・ハラー（Albrecht von Haller 1708-77）：スイスのベルンに生まれ没した医師、植物学者、特に近代解剖学の定礎者の一人。ド

イツのテュービンゲンやオランダのライデンなどで学び、医学の学位を得た後、ゲッティンゲン大学で解剖学の教授となった。自然科学全般に通じた普遍的な知識人であった。かたわら詩作にもたずさわり、特に1732年に出版された最初の詩集に、作品「アルプス」（Die Alpen）が収録されており、また自筆原稿には1729年の年次が記載されている。その作品で、ハラーはアルプスの美とそこで暮らす人々の生きざまを、祭りの風物も含めて讃歌として表現した。アルプスの美を称えたことではルソーが大きな里程標であるが、それよりも約30年早い事例として注目される。

xxiv　エルンスト・ユンガー（Ernst Jünger 1895-1998）：ハイデルベルクに生れ、南西ドイツのリートリンゲン（Riedligen）に没した思想家、軍人、作家。第一次大戦に従軍して傑出した功績があり、また永く軍務についたことをも踏まえて、創作では英雄的リアリズムと呼ばれる作風をしめした。ナチズムの軌道を敷いた面も指摘されるが、実人生ではナチスとの関係には一線を画していた。動物学・昆虫学にも造詣が深かった。

xxv　システム・シンキング（Systemdenken 英Systems thinking）：事象を多数の要素が相関するシステムとしてとらえ、各要素の繋がりと相互作用において把握することが重視される。いわゆる複雑系の理解のための方法として、アメリカの経営学者ピーター・センゲの『第五の原理』（Peter M. Senge, *The fifth discipline. The art and practice of the learning organization.* London 1992 邦訳『最強組織の法則』）で一般化に向かい、その後アンダーソン & ジョンソン『システム・シンキング　－　問題解決と意思決定を図解で行なう論理的思考技術』（Verginia Anderson / Lauren Keller Johnson, *Systems Thinking Basics from Concepts to Causal Loops.* Cambridge Mass. 1997）などがある。

xxvi　ヴォルフガング・ブリュックナー（Wolfgang Brückner 1930-L）：ヘッセン州フルダに生まれた民俗研究者。ヴュルツブルク大学教授。1970年前後にフランクフルト大学教授として当時のドイツ民俗学の改革をリードし、特にファルケンシュタイン討論会の呼びかけ人であった。その後、過去の民俗学者のナチスへの加担とその評価をめぐってドイツ民俗学会の主流とやや距離をおくようになった。それにはドイツ民俗学会が伝統的にプロテスタント教会系が優勢という事情もある。1978年からは、カトリック教会の学術支援団体ゲレス協会の支援を得て独自の専門誌『民俗学年報』（*Jahrbuch für Volkskunde*）

を主宰している。

xxvii　ヴォルフガング・ザイデンシュピンナー（Wolfgang Seidenspinner 1952-L）：ヴュルツブルクに生れ、ヴュルツブルク大学で歴史学・民俗学などを学び、2004年からマインツ大学教授（文化人類学・民俗学）。

xxviii　アードルフ・シュパーマー（Adolf Spamer 1883-1953）：マインツに生れ、ドレスデンに没した民俗学者、ゲルマニスト、美術史家。1930年代にベルリン大学の初代の民俗学科の教授となった。第二次世界大戦後は東ドイツの民俗学の基礎を据えた。

xxix　フリードリヒ・フォン・デア・ライアン（Friedrich von der Leyen 1873-1966）：ブレーメンに生れ、ミュンヒェン郊外キルヒゼーオン（Kirchseeon bei München）に没した民俗学者、ゲルマニスト。マールブルクやライプツィヒで学び、ベルリン大学のカール・ヴァインホルトの下で中世の説教詩「哀れなハルトマン」の研究で学位を得、次いでミュンヒェン大学で「エッダ」の昔話的要素の研究によって教授資格を得、ケルン大学のゲルマニスティクの教授となった。後半生は主に口承文藝研究にたずさわった。

xxx　燃える舞踏会（Bal des ardents）：フランス国王シャルル６世（Charles VI.狂気王or親愛王 在位1380-1422）の宮廷で、ある若い騎士と女官の結婚式が行われたとき、余興として国王と招待された５人の貴族が亜麻布の衣装に毛を貼りつけて野人踊り（la danse des sauvages）を踊った。ところが松明の火がその仮装に燃え移り、王ともう一人だけが助かり、他の４人は焼け死んだ。この事件をきっかけに、国王はかねて兆候のあった心理的不安定をさらに募らせたとされる。

xxxi　ヘルマン・バウジンガー（Hermann Bausinger 1926-L）：バーデン＝ヴュルテムベルク州のアーレン（Aalen）に生まれた民俗学者。テュービンゲン大学教授。1960年前後から、ドイツ民俗学の改革の中心に立ってきた。

xxxii　追憶記念地（Lieux de mémoire 独Erinerungsort）：フランスの歴史家ピエール・ノラ（Pierre Nora 1931-L）の用語。特にナショナリズムの観点から国民的なアイデンティティの結節点・結集核となるような記念的な土地や施設を指す。

xxxiii　マルチ・オプション社会（Multioptionsgesellschaft）：スイスの社会学者ペーター・グロース（Peter Gross 1941-L）の概念として知られる。グロースはザン

クト・ガレンカッペルに生れ、スイスの諸大学で社会学・経済学・経営学を学び、ベルン大学で学位を、コンスタンツ大学で教授資格を得て、ドイツのバムベルク大学の社会学の教授（1979-89）になり、次いでザンクト・ガレン大学の社会学の教授となった。主著『マルチ・オプション社会』（*Multioptionsgesellschaft.* 1994）は大きな影響をあたえた。

xxxiv　エルンスト・シュレー（Ernst Riewert Schlee 1910-94）：ホルシュタインのハイデ（Heide）に生れ、シュレースヴィヒに没した美術史家。民俗工藝研究家。ドイツとオーストリアの諸大学で哲学・ゲルマニスティク・フォルクスクンデを学び、学位を得た後、1939年からシュレースヴィヒのフォルクスクンデ・ミュージアムに研究助手として勤務し、1949年に館長となって定年までその地位にあった。民俗工藝について考察を加えた他、工業社会時代の文物の収集・展示を推進した。

xxxv　「フォイエルバッハに関するテーゼ」（*Thesen über Feuerbach*）：1845 年に当時26歳であったカール・マルクス（Karl Marx 1815-83）が記したメモ。ヘーゲル哲学を読み破って唯物論に向かったルードヴィヒ・フォイエルバッハ（Ludwig Feuerbach 1804-72）を評価しつつも、批判的なコメントを加え、唯物史観の基本となる着想を箇条書きに記したもので、1880年に発見された。

xxxvi　エアハルト・ブーゼク（Erhard Busek 1941-L）：ウィーン出身のオーストリア国民党に属す政治家。同党とオーストリア社会民主党との大連立時代に副首相をつとめた（1991-95）。

xxxvii　ヨシュカ・フィッシャー（Joschka Fischer 本名Josepf Martin Fischer 1948-L）：「緑の党」の政治家、同党が社会民主党との連立内閣を組んだ時期にシュレーダー首相のもとで外務大臣（1998-2005）を務めた。学生運動の出身者で、いわゆる68年世代の代表者の一人。政治家となる前にはタクシー運転手やポルノ小説の翻訳などさまざまな職種を転々とした。また５度の結婚をするなど、女性関係の多彩なことでもよく話題になる。

xxxviii　ローベルト・ムージールの『特性の無い男』：ムージール（Robert Musil 1880-1942）はクラーゲンフルトに生れジュネーヴに没したオーストリアの作家。長編小説『特性の無い男』（*Der Mann ohne Eigenschaften*）はドイツ20世紀文学の高峰で、イギリスのジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』、フランスのマルセル・プルースト『失われた時をもとめて』と並ぶ方法論的に特異な

大作。ムージールは社会・文化批評にも秀でており、論評としても注目すべき記述が少なくない。

xxxix　ジークムント・フロイト（Sigmund Freud 1856-1939）：モラヴィア（現チェコ）のフライベルク（Freiberg ＝Pribor）に生れ、ロンドンに没したオーストリアの精神分析学者。ユダヤ人。

xl　アドルノ（Theodor W. Adorno 1903-69）・・・文化産業（Kulturindustrie）：アドルノはフランクフルトに生れ、スイスのヴィスプに没した哲学者。いわゆるフランクフルト学派の中心的存在であった。文化産業ないしは文化工業は、マックス・ホルクハイマー（Max Horkheimer 1895-1973）との共著『啓蒙の弁証法』（*Dialekt der Aufklärung.* 1947）の章題となっている他、幾つかのエッセイでも言及される。文化が資本に操られる文化商品となっていること、またそこで文化として供されるものの本物からの逸脱を批判している。そこでの主張は、（日本人には分かり難いが）ヨーロッパ世界における文化の概念と関わっている。すなわち文化は創造力の産物であり、個体の尊厳の発露であるのに対して、産業あるいは工業は没個体的な資本の論理によるという対比がなされており、それゆえこの合成語はパラドックスである。

xli　レギーナ・ベンディクス（Regina Bendix 1958-L）：スイスのアールガウ州ブルッグに生まれた文化人類学者・民俗学者、女性。ゲッティンゲン大学教授。アメリカのバークレー大学とインディアナ大学で文化人類学を学び、後者で学位を得た後、ペンシルヴァニア大学の助教授となった。1991年からヨーロッパとアメリカを往復して、ツーリズムや多文化社会のテーマに取り組んできた。

xlii　ギーゼラ・ヴェルツ（Gisela Welz 1960-L）：ノルトライン・ヴェストファーレン州のミンデンに生れ、フランクフルト大学で文化人類学とヨーロッパ・エスノロジーをその分野の主任教授で代表的な女性研究者であるイーナ＝マリーア・グレヴェルスに就いて学んだ。1985年から1989年までフランフルト大学の文化人類学・ヨーロッパ・エスノロジー研究所の学術研究員の後、1989年から96年までテュービンゲン大学の経験型文化研究を担当するルートヴィヒ・ウーラント研究所の学術助手となり、1998年にフランフルト大学の文化人類学・ヨーロッパ・エスノロジー研究所の教授となった。研究領域では、主な学業地であるフランクフルトが外国人比率が高いなどの特色をもつこと

への関心を強め、早くから多文化社会研究に取り組み、主要な業績もそのテーマにかかわっている。

xliii　ヴィルヘルム・ブッシュ（Wilhelm Busch 1832-1908）・・・「キルメス」（*Kirmes*）：ニーダーザクセン州ヴィーデンザール（Wiedensahl）に生れ、同州メヒトハウゼン（Mechthausen）に没した漫画家、カリカチュア作家。悪童二人を主人公にした『マックスとモーリッツ』（初版1865年）は漫画史上の古典である。「キルメス」もよく知られた小品で、詩とスケッチから成る。キルメスは（起源は教会ながら）秋祭りとして世俗的な楽しみの代表的なイヴェントの一つ。ブッシュの作品は、両親の目を盗んで娘が家を抜け出してダンスの会場へ行くところから始まる。そこで皆がたのしく男女のペアーを組んで踊っているのを、気弱なコンラートが指をくわえて見ているという場面がある。やがて酒を５杯あおって気が大きくなったコンラートが日頃の弱虫とは打って変わって、喧嘩をはじめる。ケストリーンは、民俗学を（自分のファーストネームとも重なる）漫画の登場人物コンラートに擬している。

解　説

本稿はコンラート・ケストリーンの論考「（人間の）文化としての自然」（2001）の翻訳である。タイトルは内容が伝わりやすいように工夫を加えて「自然としての文化 － 文化としての自然：民俗研究における自然の概念」とした。先ず書誌データを挙げる。

Konrad Köstlin, *Kultur als Natur – des Menschen.* In: Rolf Wilhelm Brednich, Annette Schneider und Ute Werner (Hg.), Natur – Kultur : Volkskundliche Perspektiven auf Mensch und Umwelt. 32. Kongreß der Deutschen Gesellschaft für Volkskunde in Halle vom 27. IX. bis 1.X.1999. Münster [Waxmann] 2001, S.1-10.

この書誌データからも分かるように、ドイツ民俗学会の第32回大会が1999年にザクセン＝アンハルト州のザーレ河岸ハレ市において「自然　－　文化：人間と自然に関する民俗学のパースペクティヴ」をテーマとして開催されたときの基調講演にあたる。訳出にあたってタイトルを工夫したのも、大会のテーマを反映させたのである。

なお言い添えれば、訳出上の細かい工夫として、原文はまったく区切りをもたないが、ここでは小見出しをほどこした。さらに、原文は引用文も地の文に組み込まれているが、視点の異なる記述であることが伝わりやすいように、改行をほどこして特記の形態に組んだ。いずれも母語の文献なら不要なことであろうが、外国の（目下はなお）予備知識を期待し得ない分野をいくらかでも親しめるものにするための試みである。

論者の経歴と業績

コンラート・ケストリーンは1940年5月8日にベルリンで生まれた。テュービンゲン大学とミュンヒェン大学で社会学と哲学を学び、1967年にミュンヒェン大学で学位を得た。学位論文は『民の営みにおける確かさについて」である。次いで1978年にキール大学において教授資格を「シュレースヴィヒ＝ホルシュタインにおけるギルド　－　身分規定における文化の役割」によって得た。そしてキール大学、レーゲンスブルク大学、テュービ

ンゲン大学の諸大学で教授職を歴任した後、1994年にウィーン大学の正教授として同大学の民俗学科を主宰した。その間、1983年から87年までドイツ民俗学会の会長をつとめた。これと並行して、永年、インターナショナル・エスノロジー＆フォークロア協会（Societe Internetionale d' ethnologie et foloklore SIEF）の主宰でもある。また現在は、オーストリア民俗学会会長である。

（主要著作）

Sicherheit im Volksleben. 1967.

Gilden in Schleswig-Holstein. Die Bestimmung des Standes durch „Kultur“. 1976.

Kinderkultur. Focke Museum 1978.

Historische Methode und regionale Kultur. Tesdorp / Berlin 1987.

Information zum Studium der Volkskunde, eine europäische Ethnologie, empirische Kulturwissenschaft an deutschsprachigen Universitäten. Deutsche Gesellschaft für Volkskunde (Regensburg) 1987.

Ethnographisches Wissen. Wien: Institut für Volkskunde 1999.

Volkskultur und Moderne. Wien: Institut für europäische Ethnologie 2000.

この書誌リストを見る限り、書物の形態は必ずしも多くはない。上記には編著もあり、またドイツ語圏の大学で民俗学関係の学科・講座・開講科目の情報と教育職の案内をまとめたものをも含めている。後者は学界の運営者の立場からの活動であり、その点では、専門分野の良きまとめ役である。

しかしこれらと並行して、専門の諸誌への寄稿はかなり多数に上る。学界のまとめ役の活動は、組織運営だけでなく、現今のドイツ民俗学がかかわる諸領域を幅広く把握していることをも意味している。ここでも＜民俗学と自然＞を総合テーマとする発表大会の基調報告を、それにふさわしい問題意識と課題設定においてこなしている。その種類の論考もかなり多数なのである。

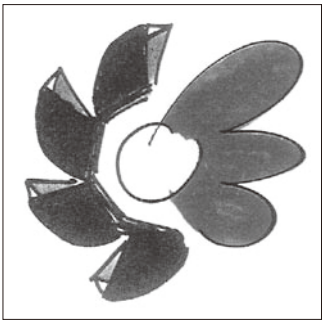
幾分私事にもかかわるが、コンラート・ケストリーン氏の存在を何らかの形で日本に案内したとの気持ちは早くからもっていた。1994年から一年間テュービンゲン大学に滞在したとき、筆者の受け入れについてケストリーン氏のお世話になったということもあるが、それは二次的な理由である。やはりドイツ学界における重みから、氏は注目したい一人なのである。なお20年近く前には、氏がフォークロリズムに関してかなり早い時期の1970年前後に好論文を発表していたことにも惹かれたのである。また氏の教授資格論文であるギルドの研究もその頃読んで強い印象をもったものである。

なおギルドの研究に因んで言えば、氏は、歴史民俗学の大家であるカール＝ジギスムント・クラーマーの親しい後輩で、その方面の研究において重なるところがある。同時に、ドイツ民俗学がこの数十年特に学界を挙げて取り組んできたのは、現代社会あるいはポスト･モダンのなかの民俗学、さらにEU時代における民俗研究であるが、その大課題に要所々々で識見を発揮することをもとめられたようである。

民俗研究における自然のテーマと本稿の特徴

はじめに記したように、本稿は、ドイツ民俗学会が＜自然と人間＞をテーマに大会を開催したときの基調講演である。そしてその課題に応えるための構図となっている。自然は、民俗学でも近年よく話題になるテーマである。その点では本邦の民俗学にとっても一般性があろう。そしてドイツの民俗研究者なら、それをどう始めるか、という関心も決して非常に特殊なものにとどまらないとも予想される。

とまれ、民俗学が自然をテーマにするときに何に留意すべきかを、大きな射程でとらえているのが本稿の特徴である。仮にそれを敢えてまとめれ



ドイツ民俗学大会（於ハレ）のロゴ　1999 年
左の花弁４枚は黒、右の３弁は赤

ば、次の３点になろう。

一つは、民俗学が自然をテーマにするとしても、＜自然＞は自明の概念ではないことの確認である。それはただちに哲学や人類学・文化人類学・社会学、さらに自然科学など、隣接学と関連分野にも目配りすることがもとめられるが、その要請を本稿はある程度満たしている。おそらく、本邦の読者に最も参考になるのは、この点ではなかろうか。二つ目に、このテーマにかかわるドイツ民俗学の学史への目配りである。具体的には、民俗学は、農民や村落を基準と見るような姿勢をつよくしめしてきたが、それは言い換えれば、自然と一体、ないしは自然に近しい事象を基準にし、またその基準に依拠して発展したところがある。しかし農民や村落が自然であると言い得るかどうかは、本当は怪しい。三つ目に、（これは二番目からの必然的な延長になるが）現代社会ないしはポスト・モダンの課題としてこのテーマをとらえる視点である。すなわち、農林漁業に伝統的な手法でかかわる村落民が（農林漁業者は技術機器に使いこなすエンジニアである以上）存在しなくなった現在において自然とは何か、という問いである。この三点をめぐって、自然をテーマに選んだ大会の冒頭の講演にふさわしく、本稿は短い時間内でふれている。

文体にもふれると、現代ドイツの民俗研究（だけのことではないが）の表現の傾向を映して、ときには幾らか上調子のきらいがないではない、というのが率直な印象である。本論の説くところは難解でも突飛でもなく、

むしろ素直と言ってもよいが、取り入れられた種々のトピックが本邦では未知という点はあろう。ともあれ、現今のドイツの人文・社会系の学術論文では、ここでのような表現が割合多く、それゆえ只今の時代の言語上の技巧をこの論者も分有しているということであろう。その意味では（よいか悪いかはともかく）学術文体の現在の（全面的ではないかもしれないが、ある程度一般的な）流行を期せずして伝えることにもなる。

さらに、文体に併せて言い添えるなら、この論考を読むには、かなりの予備知識がもとめられる。しかしその多くは、ドイツ民俗学界のメンバーが共有しているもの以上ではない。多数の人名も、会場で聞くなり、報告書で読むなりするドイツ民俗学界の関係者には既知の範囲内と思われる。学史上の指標的な研究者の名前が幾人も言及されるが、少なくとも学界のなかなら誰もが知っているわけである。ケストリーンはまた自分よりもずっと若い研究者たちの名前（ザイデンシュピンナー、ベンディクス、ヴェルツなど）を挙げる気遣いをも見せている。多くは現行の教授として今日のドイツ民俗学の中心に位置する人々でもあるので、それらについても経歴の解説になるような訳注をつけた。

訳注は煩雑なほどになったが、日本ではほとんど知られていない分野でもあるので、それも含めて案内になればと考えた。そのさい、訳注のつけ方は、よく知られている人名や事項は簡単にとどめ、反対に、本邦への紹介が進んでいないと思われるものについては、やや詳しく説明した。一例を挙げるなら、自然への志向について里程標と目される文化史上の二人の人物のうち、ジャン・ジャック・ルソーは極くあっさりすませ、アルブレヒト・フォン・ハラーにはある程度字数を費やした、といった工夫である。

なお本稿の訳出に当たっては、ケストリーン氏とドイツ民俗学会の好意的な配慮を得たことを付記する。　25.Dec.2012 S.K.